慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フレーム分析再評価 : 認知言語学と物語論の観点から
Sub Title	Rethinking frame analysis : a perspective from cognitive linguistics and narratology
Author	藤田, 真文(Fujita, Mafumi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2007
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.12 (2007.) ,p.32- 42
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: メディア研究におけるフレーム分析
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20070000-0032

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第 12 号（2007）

フレーム分析再評価

認知言語学と物語論の観点から

Rethinking Frame Analysis：A Perspective from Cognitive Linguistics and Narratology.

藤田　真文

1．フレーム分析の認知・言語的次元

マス・コミュニケーション研究における「フレーム分析（frame analysis）」は、マス・コミュニケーションの情報伝達が情報の受け手（audience）の現実認識に大きな影響力を持つことを主張するパワフル・メディア論の系譜に位置づけることができよう。

竹下俊郎は、争点中心的バイアスという議題設定研究の欠点を補うものとフレーム分析を評価している。竹下のいう議題設定研究の争点中心的バイアスとは、次のようなものである。①議題設定研究は、メディアが伝え受け手の現実認識を構成する要素を、選挙で争われる公共的争点に限定する傾向がある。②議題設定研究は、受け手がどの争点を重要なものと知覚しているかという「一般的な『問題領域』を表わすラベル」の優先順位だけを問題にしている。したがって、「議題設定研究は争点の内実を調べずにトピックの『殻』だけを扱ってきた」（G．コシッキ）と批判される。

フレーム分析は、「メディアがある争点や出来事をどのようにフレーミング（枠づけ）しながら報じるのか」を問うことによって、争点の「内実」を明らかにすることを志向しているのである（竹下 1998:204-210）。

フレーム分析の先駆的著作の中でゴフマンは、われわれが「状況を定義」する際の「組織化の原則」とフレームをとらえている（Goffman 1976:10-11）。ゴフマンは、社会的（相互）行為場面での「行為者」による状況・経験の「組織化（パターン化）された」定義づけを問題にしている。したがって、この定義づけには他者との言語・非言語コミュニケーションなど多様な要因が関与している。それに対してマス・コミュニケーション研究では、この「状況定義の組織化の原則」はメディアによって受け手に与えられると仮定する。対面的な相互作用場面とは違って、メディアによって提供される「状況定義」は、送り手によって構築された言語と、言語を媒介にした受け手の現実認知によって担われる。メディアのフレームは、ほとんど言語に依存していると考えてよい。

カペラとジェイミソンは、「記者や制作者がニュース価値のある出来事を伝えようとする際にどんな仕掛けを使うことが出来るかという観点からフレーミングを考えることができる」としている。彼らは、パンとコシッキのモデルを引用し、ニュースフレームには、①統語構造、②テーマ構造、③スクリプト構造、④修辞構造という４種類の組織構造があるとする（カペラとジェイミソン 1997＝2005:69-70）。

①統語構造……見出し、前文、エピソード、背景、結末などの典型的な配列
②テーマ構造……問題に関連した特定の命題
ex.「スリーマイル島の原発事故はテクノロジーの暴走ではなく人間の過失である」
③スクリプト構造……物語の標準的な筋
ex.（17%の得票率だった候補者に対して）予備選挙で候補者は「予想よりも善戦した」＝成功談として叙述⇄「予想よりも伸びなかった」＝失敗談として叙述
④修辞構造……記事の性格を伝えるための表現方法の選択

カペラとジェイミソンは、このようにディスコースの記述の仕方を選択することによって、同じ状況に対して異なった定義づけをマス・メディアが行うことができるとする。そして、ニュースによる社会的状況の定義づけがフレームをもっていると明確に言えるのは、次のような条件をみたしているからだとする（カペラとジェイミソン 1997＝2005:71 括弧内は筆者注）。

①フレームは識別可能な概念的・言語的特徴を持つべきである（＝フレームはその効果だけからではなく、テクストの特徴からも識別可能なものであるべきだ）。

②ジャーナリズムの実践のなかに広く見いだされるものでなければならない（＝ニュースを利用する人々が頻繁に繰り返し経験するものであればこそ、その効果を調べる価値がある）。

③種々のフレームは信頼性をもって互いに区別されなければならない（＝研究の対象となるフレームは、ニュースの利用者が見てもそれとわかるようなものでなければならない。すなわち、特別の専門家がビデオを一コマずつ見てようやく認識できるようなものであってはならない）。

カペラとジェイミソンによる以上のフレーム分析の概念化は、次のような理論的特徴を持つ。（1）ニュースフレームは、言語体である。フレームの効果は、言語の作用によって成立する。（2）フレーミングの主体は送り手である。カペラとジェイミソンは、新聞記者やニュース番組制作者の言語実践の結果、フレームが構築されるとしている。

（2）の前提には、マス・コミュニケーション研究で長い間支配的であった「効果論パラダイム」が関係している。マス・コミュニケーション研究の古典的な命題である「ラスウェルの公式」は、「コミュニケーション行為を記述するうえで、便利な方法は次の質問に答えることである。誰が、何を、どのチャンネルで、誰に、どんな効果を伴って言うのか」とする（Lasswell 1948:66）。マス・コミュニケーション研究は、送り手がメッセージによって受け手におよぼす影響力を問題にしてきた。送り手のメッセージが影響力の源泉であり、送り手のメッセージが受け手に強い効果を及ぼす

のか（強力効果説）、それとも効果はさほどないのか（限定効果説）を検証しようとしたのである。

マス・コミュニケーション研究では、自明のものとされている効果論パラダイムだが、他の学問分野では必ずしもそうではない。ゴフマンのフレーム分析では、フレームによって状況・経験の「組織化（パターン化）された」定義づけを行うのは、社会的（相互）行為場面での「行為者」である。このフレームは、社会的（相互）行為場面に先在的な学習によって獲得されたものであるとしても、一方的に他者によって付与されるものではない。マス・コミュニケーション研究では、受け手のフレームはもっぱらマス・メディアという他者によって与えられるものとされているのである。

2．フレーム分析と認知言語学

（1）図地分化、スキーマ、フレーム

次にカペラとジェイミソンによるフレーム分析の概念化を導きとしながら、マス・コミュニケーション研究におけるフレーム分析と認知言語学の関係を見ていきたい。カペラとジェイミソンは、「フレーミングはニュースストーリーのなかのある情報を目立たせ、他の情報の重要性を目立たなくする」（カペラとジェイミソン 1997＝2005:93）と述べ、ニュースフレーム概念が認知科学で広く共有されている「図地分化」に負っていることを明らかにする。

「図地分化（figure-ground separation）」とは、いくつかの要素から構成される事象を視覚的にとらえる場合、ある一つの事象に注目すると他の事象が背景に退いてしまうことをいう。よく知られる事例が、「ルビンの盃」である。「ルビンの盃」では、図の白い部分が何かを表象すると見なした場合、盃が浮き出て見える。だが、図の黒い部分を注視した場合には、向かい合う人の顔に見える。盃が「図」として意識される時には、黒い部分は「地」となる、一方、向かい合う人の顔を「図」として意識した時には、白い部分が「地」となる反転がおこる。「ルビンの盃」では、盃と向かい合う人の顔を同時に「図」として認知することはできない。両者は排他的である。

認知言語学では、図地の分化は言語によっても可能であるとする（辻 2003:68）。次の２文例を参照していただきたい。

［文例１］Bees are swarming in the garden.（ハチが庭に群がっていた。）
［文例２］The garden is swarming with bees.（庭はハチでいっぱいだった。）

［文１］では、ハチが文の描写の対象＝「図」として前景に出てくるのに対し、［文２］では庭が「図」となっている。このような反転を可能にするのは、swarm という動詞が「（虫などが）群れている」、「（ある場所が虫などで）いっぱい」であるという２つの意味を持つからである。

フレームとよく似た認知科学の概念に、スキーマ（schema）がある。スキーマとは、「人が経験から身につける知識のまとまり」のことであり、「人は日々新たに出会うさまざまの経験を、自分が持っているスキーマに当てはめながら解釈していく。」「あらたな経験を取り込むたびに、スキーマ自体も改訂され、より的確に経験を解釈できるようになっていく」（辻 2003:87）。

例えば、「布が破れたので、干し草の山が重要であった。」という文の意味は、一読したところあいまいである。「破れた布」という対象を「干し草の山が重要である」という命題に結びつけるための知識を、少なくとも筆者は持ち合わせていない。ところがこの文を解釈するために、「落下傘を使った降下」という枠組みを与えられたとしたら、あいまいさはいくぶん縮減する。「破れた布」とは落下傘のことであり、「干し草の山」は着地のショックをやわらげるために「重要」であったのだろうと推測できるからである（Bransford and Johnson の事例）。

認知言語学では「フレーム（frame）」という概念を、「典型化された日常的場面をもとに成り立っている（中略）出来事を理解する枠となる知識構造」「日常の経験からスキーマ化を通じて形成された、容易に想起が可能な知識」と定義している（大堀 2002:36-37）。フレームとは、ある日常的な場面において経験の蓄積によって固定化されたスキーマ（解釈の枠組み）ということができる。例えば、以下の文を参照していただきたい。

［文例３］I went to a restaurant. The waiters were ill-mannered.（私はレストランに入った。ウェイターは態度が悪かった。）

［文例４］We took a cab. The driver was quite friendly.（私たちはタクシーに乗った。運転手はとても親切だった。）

この文で、［文例３］の waiters と［文例４］の driver は、いずれも初出の新情報である。にもかかわらず、ふつうは既出の対象を示す「the」が付けられている。これは、日常生活において蓄積されたフレームに基づく知識から、レストランに入るとウェイターが接客してくれる、タクシーに乗れば運転手がいるという予測が可能だからである（大堀　2002:39-40）。

認知言語学において最初にフレームという概念を用いたフィルモア（C. J.Fillmore）は、フレームを「関連する複数の要素が一つに統合された具体的な知識の型、あるいは各要素が互いにまとまりをなすような、経験から抽出された式型」、さらには「それなしでは単語が表わす概念が意味をなさないような認知構造」と定義づけている（ウンゲラーとシュミット 1996＝1998:253）。

まずフレームは、「関連する複数の要素を一つに統合する具体的な知識の型」である。例えば、［COMMERCIAL EVENT（商行為）］というフレームのさらに下位フレーム［BUY（購入）］を事例に考えてみる。［BUY］というフレームは、「買い手」、「売買されるもの」、「お金」、「売り手」という複数の要素を統合する。［BUY］というフレームを表現した、以下の例文を参照してほしい。

［文例５］David bought an old shirt from John for ten pounds.

［文例５］では、「買い手」、「売買されるもの」、「お金」、「売り手」という複数の要素が統合されている。そして図地分化という点から見ると、［BUY］というフレームは、主語である「買い手」と目的語の「売買されるもの」を図として前景化させている。それに対して、同じ［COMMERCIAL

EVENT］フレームの下位にある［SELL（売却）］フレームを表現した、以下の例文と比較してみたい。

［文例６］John sold an old shirt to David for ten pounds.

［SELL］フレームは、「売り手」と「売買されるもの」を図として前景化していることがわかる。その他、［CHARGE（請求）］フレームは「売り手」と「お金」、［PAY（支払い）］は「買い手」と「お金」を図として前景化する。このようにあるフレームを選択することは、ある統語的な「視点」（perspective）をとることに結びつく。ウンゲラーとシュミットは、このような視点は注意（attention）を特定のものに向ける認知能力に基づいているとする（ウンゲラーとシュミット 1996＝1998:250 -256）。商行為の中でも、［BUY］フレームは、「買い手」と「売買されるもの」に注意を向け、「売り手」と「お金」を副次的な要素として統合する視点を与えるといってよい。

次に、フィルモアのいう「それなしでは単語が表わす概念が意味をなさないような認知構造」であるというフレームの特性を見ていきたい。フレームは、それが与えられると受け手が持っている世の中についての一般的な知識に基づく「推論（inferences）」を活性化する。例えば、［FLYING ON A PLANE（飛行機の旅）］というフレームは、PILOT、 FLIGHT ATTENDANT、SEAT BELT、FIRST CLASS などのカテゴリーを活性化する。さらには、飛行機の旅のより個別的な状況に関する知識を表現する［EATING（機内食）］［WATCHING THE MOVIE（機内映画）］などの下位フレームもある。

また、［FLYING ON A PLANE］フレームは、［EATING］という下位フレームに「デフォルト値」（フレーム内の要素が「通常の」状況で持つ値）を与える。飛行機の旅の［EATING］において、高価な食器が並べられ、テーブル・キャンドルものっている大きなディナーテーブルで食事できるとは、だれも思わない（ウンゲラーとシュミット 1996＝1998:256-258）。

> 私たちの経験に根ざし、長期記憶に貯えられているこうした予測は、フレーム体系の一部であって、私たちがそうしたフレームと関連する言語表現を生み出し理解するのを助けるのである。（ウンゲラーとシュミット 1996＝1998:258）。

認知言語学では、私たちの日常生活ではこれらのフレームがある決まった順序で時間軸に沿って積み重なっていくと考える。認知言語学では、繰り返し生じる出来事の連鎖についての知識構造を「スクリプト（script）」という。［FLYING ON A PLANE］では、空港に行く、搭乗、座席を探す、シートベルトを締める、離陸などから、着陸、シートベルトを外す、飛行機から降りる、空港を出るまでの一連のスクリプトがある。［FLYING ON A PLANE］は、われわれが日常的な知識として持っている行為連鎖のスクリプトを活性化させる（ウンゲラーとシュミット 1996＝1998:258-259）。

（2）認知言語学によるニュースフレーム論の評価

先に述べたようにカペラとジェイミソンは、ニュースにおけるフレーミングの主体は記者や制作者などの送り手であるとしていた。彼らは、「フレーム」という概念を「(送り手によって) テクストがどう構造化されているかを表わすものとして用いる」。一方で、スキーマやスクリプトを「オーディエンスが持つ知識を指す」ものとして、区別している (カペラとジェイミソン 1997＝2005:60)。前節で見たように認知言語学においては、スキーマやスクリプトとフレームは一連の概念ととらえるのが一般的である。だが、ここではその差異は問題としない。ニュースにおけるフレーミングが、認知にどのような影響を与えるとカペラとジェイミソンが見ているかを見ていく。

カペラとジェイミソンは、「メッセージの理解のされ方や反応の生じ方は、メッセージ内容だけではなく、メッセージのフォーマットにも依存するという考え方」がフレーム分析の前提だとする。そして、フレーム分析の古典的な事例としてカーネマンとトヴァスキーの調査を引用する。カーネマンとトヴァスキーの調査は、まず［文例７］のようなインストラクションを行ったあと、［文例８］と［文例９］を異なった被験者グループに読ませて、選択肢を選ばせるものであった（カペラとジェイミソン 1997＝2005:62-63)。

［文例７］アメリカ合衆国がアジア発の奇病の発生に対して対策を講じていると想像してみてください。この病気では600人の死者が出ることが予想されています。二通りの対処計画が提案されました。計画を講じた場合の結果の正確な科学的推定は次のとおりです。

［文例８］

・もし計画Ａが採用されれば、200人の人々が助かる。(72%の実験参加者が選択)
・もし計画Ｂが採用されれば、600 人全員が助かる確率は３分の１あり、誰も助からない確率は３分の２ある。(28%が選択)

［文例９］

・もし計画Ａが採用されれば、400人の人々が死ぬ。(22%の実験参加者が選択)
・もし計画Ｂが採用されれば、誰も死なない確率が３分の１あり、600 人全員が死ぬ確率は３分の２ある。(78%が選択)

［文例８］と［文例９］を読み比べてみればわかるように、二つの文で示しているメッセージの「内容」は同じである。にもかかわらず、「助かる」ということを前景化している［文例８］と「死ぬ（死なない)」を前景化している［文例９］とでは、選択肢の選択結果がまったく逆となった。表現の仕方を変えることで異なった受け手の反応を引き出すフレーミングが生じた例である。

カペラとジェイミソンは、テクストを解釈するコンテクストを与えることがフレーミングの効果だとする。

> フレーミングはコンテクストを提供するが、コンテクストは既存の知識を活性化する。活性化された知識はテクストと協同して、テクストの理解を生み出す。（中略）フレーミングは特定の解釈を可能にするだけでなく、推論の仕方にも変化をもたらす。推論はオーディエンスが読んだり見たりするメッセージによって手がかりを与えられる。（カペラとジェイミソン 1997＝2005:64）

このようなフレーミングのとらえ方は、前項で紹介した認知言語学の知見を適切に反映している。「助かる」と「死ぬ（死なない）」のどちらを言語によって前景化するかで「図と地の反転」がおこる。「助かる」というフレームは、［文例８］のメッセージを解釈するためのコンテクストを提供する。これは、「布が破れたので、干し草の山が重要であった。」というあいまいな文の意味が、「落下傘を使った降下」という枠組みを与えられることであいまいさが縮減することに似ている。

また、［文例７］の「600 人の死者が出るアジア発の奇病の発生」「奇病の発生に対するアメリカ合衆国の対策」というインストラクションが、調査が行われた 1980 年代初頭のアメリカでどのようなリアリティを持っていたかは定かではない。だが、このようなインストラクションが、「関連する複数の要素を一つに統合する」被験者の具体的な知識の型、一般的な知識に基づく被験者の「推論（inferences）」を活性化した結果、［文例８］と［文例９］における選択の差異が生まれたといえよう。

カペラとジェイミソンは、次のように言う。

> ニュースフレームはニュースになる出来事のある特徴を目立たせ、他の特徴を目立たなくする。ストーリーななかで目立ったものは受け手の心的な連合を活性化し、知識システムにおける活性化拡散のプロセスを経て他の関連諸概念を同じように刺激する。（カペラとジェイミソン 1997＝2005:92）

ニュースフレームは、ニュースにおける「図」を決定する。図の決定によって、出来事を解釈するための、「関連する複数の要素を一つに統合する」の受け手の知識の型や「推論（inferences）」を活性化するというのである。ニュースフレーム論は、送り手がメッセージを通じて行うフレーミングが、受け手のフレーム形成に一定の影響力を持つとする。

３．物語論の観点からのフレーム分析再評価

（１）複雑性の縮減と記憶

カペラとジェイミソンは、ニュースフレーム論の理論的基盤として、認知言語学とともに認知的-物語叙述的アプローチをあげている。

（フレームによって統合された）「知識のネットワーク」もまた、人々が政治に関して獲得してきたストーリーの貯蔵庫なのであろうし、それが、あまりにも頻繁に混乱する政治的・社会的世界を、人々が理解できるようにしているのであろう。（カペラとジェイミソン 1997＝2005:97-98）

メディアフレームへの認知的-物語叙述的アプローチは、次のような命題から成り立っている。

①ストーリーは出来事を理解し筋の通ったものとするための基盤である。

②情報をストーリーの形に体制化することが情報の検索を促進する。

③環境のなかで目立った手がかりは、どのストーリーが活性化するかに偏向を与えうる。（カペラとジェイミソン 1997＝2005:98）

カペラとジェイミソンは、ストーリーがある出来事に対する人々の記憶を補助する（「ストーリー記憶」）ともいう（カペラとジェイミソン 1997＝2005:100）

以上のようなメディアフレーム研究の主張を、物語論から評価するとどうなるであろうか。リクールは、アリストテレスの『詩学』を検討した。そして、物語の筋（統辞構造）とは出来上った組織ではなく、作者によって意識的に組み立てられるものとアリストテレスが認識していたとする。だからそれは「筋立て（る）」という動詞としてとらえられるべきものだという。

物語の中の出来事は、偶然的に「Aの次にBがくる」わけではなく、「AゆえにBがくる」との必然的な因果関係によって結ばれている。物語は、「Aの次にBがくる」という時間の経過で出来事の連続を語りながら、「AゆえにBがくる」のは必然だというように因果関係で出来事を結びつけているのである。いうまでもなくこの因果関係は、作者によって「筋立て」られたものである（リクール 1983＝1987: 60,69-70）。

レヴィ＝ストロースは、未開社会における神話の構造を研究し、次のように述べている。

いわゆる未開社会の生活と思考を支配している実践的理論的論理は、（中略）経験の総体をあらかじめ整理縮小して、その上で互にはっきり異なるものと考えるにいたった諸要素を常に対立させうるということが論理の原則である。（レヴィ＝ストロース 1962=1976:89）

レヴィ＝ストロースによれば、未開社会では社会や世界を認識する際に、例えばトーテミズム（totemism）による部族対立の説明など、複雑な要素をできるだけ単純な対立図式に解消しようとする。対立図式は、上／下、空／地、昼／夜、夏／冬……などの二項対立や二項対立を組み合わせた三項対立、四項対立で示される（レヴィ＝ストロース 1962=1976:169）。

レヴィ＝ストロースは、氏族などの社会条件と動植物の種などの自然条件との間に対応関係を説明するうえで、神話が役に立つとする（レヴィ＝ストロース 1962=1976:109）。登場人物の対立＝範列構造は物語の進行と無関係に存在しているわけではない。グレマスは、神話、民話、戯曲など

の「劇的な物語」では、物語は「逆転した内容・否定的な提示」（＝望ましくない状況）が発生するところから始まり、最後に「定立された内容・肯定的な提示」（＝望ましい状況）が回復されるところで物語が終わるとした（グレマス 1970=1992 :218）。

W. J. オングは、『声の文化と文字の文化』において記憶と物語の関係を次のように述べる。

> （口承に依存した）声の文化は、自分たちの知っている多くのことを保存し、整理し、伝達するために、人々の行動についての話を用いるのである。すべてではないにしてもほとんどの声の文化は、非常に分量のある物語ないし一連の物語を作り出している。（中略）その分量と、それが語る場面や［人びとの］行動の複雑さゆえに、こうした物語は、しばしば、声の文化における伝承のもっとも広大な貯蔵庫となっている。（オング 1982＝1991:286）

二項対立によって社会・世界認識の複雑性の縮減（単純化）が行われ、記憶・再生しやすい神話となる。この点は、カペラとジェイミソンがいうニュースの「ストーリー記憶」と同様である。

（2）物語理解と記憶

イーザーは、『行為としての読書』において物語論と認知科学の融合を試みている。イーザーは読書過程における「視点の移動」を論じる。読書の際に読者は、テクスト全体を一気に把握することはできない。読者は、次々と視点を移動して、テクストの部分部分をとらえて行く。これが読書行為の基本である。視点を移動して読者は何を読んでいるかと言えば、一つの単語や文を超えた大きさをもつ「志向的相関体」であるとイーザーはする。「志向的相関体」とは、文がさまざまに結合してできる文を超えた意味単位である。「志向的相関体」は、さまざまな具体的な場面や、事物間の矛盾や一致を作りだす(イーザー　1976＝1982＝2005:187-190)。

そして、「志向的相関体」という文の結合が作り出されるのは、「読者の意識の中」においてである。イーザーによれば読書過程においては、「予覚（Protention）」と「保有（Retention）」が常に交替している。「予覚」とは、次に来るものへの期待である。「個々の文が示す意味方向は、つねに次に来るものへの期待を含んでいる。」(イーザー 1976＝1982＝2005:191)

文学作品の中で文の相関体は、ある具体的な場面のようなまとまった形でとらえられる。ところが、一つの文の相関体は、テクストのすべての意味を伝えてくれるわけではなく、どこかが欠落している。例えば、推理小説において殺人事件現場の最初の描写は、現場の凄惨さを詳細に伝えても、犯人がだれかを断定する決定的な情報が欠落している。読者は、読み進めて行くにしたがって、その欠落が別の情報によって補足されるだろうとの「期待」をもっている。その時読者の意識の中には、殺人事件現場の最初の描写についての記憶が「保有」される。

読者がテクスト読み進めて行くうちに、新たな相関体が最初の「期待」を充足していく。推理小説では最初に提示された事件現場の数ある情報の中で、犯人を特定する情報が絞られる。だが小説では、読み進めて行くうちに最初の「期待」が修正される、逆にまた裏切られる場合もある。事件

現場の最初の描写には、犯人を特定する情報がないことがわかるかもしれない。あるいは、事件のなぞを深めるために、刑事がわざと間違った推理をしていたかもしれない。読み進めているうちに過去に「保有した」記憶が、忘却から急に呼び戻され新たな意味をもつこともある。

> このように読書過程においては、期待は常に修正を加えられ、記憶は新たな変化を起こし、それらは相互に作用し合う。だが、テクスト自体は、期待やその修正の仕方を指示しているわけではないし、また記憶がどのような結びつきをしうるかも明示してはいない。こうしたことは読者の領域に属することであって、ここに読者が綜合行為によって、テクストを自分の意識に翻訳し転移する過程の第一段階を見ることができる。（イーザー1976＝1982＝2005:192）

カペラとジェイミソンは、シェンクとエイベルソンの研究を引用しながら、「人々が最もよく知り理解しているのはストーリーである。そしてその結果、うまくいっている理解のほとんどは、新しい情報を聞き手にとって意味のあるストーリーの中に組み込んでいる。」とする（カペラとジェイミソン 1997＝2005:100）。シェンクとエイベルソンの物語理解が複数のニュース・テクストの横断的なストーリー形式の保持を、一方イーザーの読書過程論がある一つのテクストの読みが完結するまでを問題にしているという違いはあるものの、以下のようなシェンクとエイベルソンの物語理解についての主張はイーザーの読書過程における記憶の指摘と重なる部分が多い。

> 新しいストーリーが現れると、われわれは、それに関連するわれわれの信念を見つけようと企てる。そして、われわれは、その信念に結びつけられたストーリーを見つけだし、そのストーリーをわれわれが処理中のものと記憶の中で比較する。そのとき新しいストーリーについてのわれわれの理解は、古いストーリーの役目になるのである。（Shank and Abelson 1995: 23　カペラとジェイミソン 1997＝2005:99 より引用）

このことは、ある社会事象についていったん形成されたニュースフレームがオーディエンスに記憶される。次に、同種の社会事象に関する新しいニュースが出てきた場合、それを理解する基盤として呼び戻されることを意味する。

4．結語

以上見てきたように、認知言語学と物語論の観点からするとマス・コミュニケーション研究における「フレーム分析」は、議題設定研究に向けられた「争点の内実を調べずにトピックの『殻』だけを扱ってきた」というG．コシッキの批判をまぬがれているように思われる。

言語による「図地分化」の作用、および物語による受け手の記憶の形成によって、「フレームは識別可能な概念的・言語的特徴を持つべきである」としたカペラとジェイミソンのニュースフレームの規定は、妥当なものと考えられる。

【文献】

J.N.カペラ・K.H.ジェイミソン 1997＝2005 『政治報道とシニシズム　戦略型フレーミングの影響過程』平林紀子・山田一成監訳、ミネルヴァ書房。

Erving Goffman　1976　*Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience.* Harper & Row.

A.J.グレマス　1970=1992　『意味について』赤羽研三訳、水声社。

W. イーザー　1976＝1982＝2005　『行為としての読書』轡田収訳、岩波書店。

H.D.ラスウェル　1948＝1968　「社会におけるコミュニケーションの構造と機能」W.シュラム編『マス・コミュニケーション　マス・メディアの総合的研究』学習院大学社会学研究室訳、東京創元社。

C.レヴィ＝ストロース　1962=1976　『野生の思考』大橋保夫訳、みすず書房。

大堀壽夫　2002　『認知言語学』東京大学出版会。

W. J.オング　1982＝1991　『声の文化と文字の文化』桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳、藤原書店。

P.リクール　1983＝1987　『時間と物語［Ⅰ］フィクション物語における時間の統合形象化』久米博訳　新曜社。

Shank,R.C. and Abelson,R.P. 1995 *"Knowledge and Memory: The Real Story," in Wyer,R.S.,ed.,Knowledge and Memory : The Real Story Advances in Social Cognition, vol. Ⅷ.* Hillsdale, NJ:Lawrence Erlbaum.

竹下俊郎　1998　『メディアの議題設定機能　マスコミ効果研究における理論と実証』学文社。

辻幸夫編　2003　認知言語学への招待』大修館書店。

F.ウンゲラー・H.-J.シュミット　1996＝1998　『認知言語学入門』池上嘉彦他訳、大修館書店。

（ふじた　まふみ　法政大学社会学部）